

3. 花きの施肥

1. キク（施設、露地・雨よけ）	37
2. バラ（加温周年型：養液栽培）	38
3. カーネーション（加温周年型）	39
4. トルコギキョウ（促成、半促成、夏秋）	40
5. ホオズキ	40
6. スカシユリ	41
7. オリエンタルハイブリッド	41
8. グラジオラス（促成、普通、抑制）	42
9. ストック	42
10. シンテツポウユリ	43
11. シュツコンカスミソウ	43
12. スターチス・シヌアータ（促成、半促成）	44
13. スイートピー	44

3 花きの施肥 [\[目次に戻る\]](#)

この施肥量は従来の主要花き施肥量を土台に、試験研究機関や現地での試験結果等を加味して主要品種を対象に設定したものである。各地域において品種や気象条件、土壌、耕種方法等が異なる場合には、この施肥量を参考にして地区ごとに施肥計画をたてること。特に花きは品種が多様なことから、新しい品種を導入する場合などは、品種の特性を把握して、施肥量を加減することが必要である。

◎施肥量を設定した作物の作型と主要品種

品 目	作 型	播 種 (さし芽)	定 植 期	収 穫 期	主 要 品 種
キ ク	施設 夏秋ギク	3～5月	4～6月	6～9月	精の一世 神馬
	秋ギク	7～10月	8～11月	10～5月	
	露地・雨よけ 夏ギク	9～3月	10～4月	5～7月	
	夏秋ギク	3～5月	6～7月	7～9月	
	秋ギク	5～6月	6～7月	10～11月	
バ ラ	加温周年	—	3～5月	周年	ローテローゼ
カ ー ネ ー シ ョ ン	加温周年	5～6月	6～7月上旬	10～5月	フランススコ
ト ル コ ギ キ ョ ウ	促成	5～6月	9月	12～2月	ボヤージュ、ボン ボヤージュ系 セレブ系 ほか
	半促成	6～7月	10月	4～5月	
	夏秋	12～3月	3～5月	7～9月	
ホ オ ズ キ	普通	—	11月～1月	7～8月	丹波ホオズキ 佐賀H5号
ス カ シ ユ リ	無加温	—	10月	4～5月	コネチカット キング
オ リ エ ン タ ル ハ イ ブ リ ッ ド	加温周年	—	周年	周年	カサブランカ
グ ラ ジ オ ラ ス	促成	—	9月～12月	6～9月	トラベラ
	普通	—	3～5月	7～8月	
	抑制	—	7～9月	12～1月	
ス ト ッ ク	11～12月出	7～8月	8～9月	11～12月	高波、早麗
シンテッポウユリ	普通	12～1月	4～5月	7～9月	雷山系
シ ュ ッ コ ン カ ス ミ ソ ウ	秋冬切り	—	8～9月	10～12月	雪ん子
ス タ ー チ ス シ ヌ ア ー タ	促成	—	9月	11～4月	培養系
	半促成	—	10月	1～5月	
ス イ ー ト ピ ー	冬春出荷	8月	9月	11～4月	セレモニー系

1. キ ク（施設、露地・雨よけ） [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標

塩類集積と連作障害の回避のため深耕と有機物の施用及び適正な施肥管理を行う。

4) 施 肥 量

○ 施 設

マルチ栽培		10 a 当り
区 分	総 量 (成 分)	元 肥
窒 素	25kg	25kg
リ ン 酸	20	20
カ リ	22	22
施 用 期		定植20～ 30 日 前

ノンマルチ栽培		10 a 当り		
総 量 (成分)	元 肥	追 肥		
		1	2	3
30kg	14kg	6kg	6kg	4kg
25	16	3	3	1
26	11	6	6	3
	定植10～ 20 日 前	活 着 後 (摘心前)	摘 心 後	花 芽 分 化 前

○ 露地・雨よけ

区 分	総 量 (成 分)	元 肥
窒 素	25kg	25kg
リ ン 酸	25	25
カ リ	25	25
施 用 期		定植20～ 30 日 前

5) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 好適 pH 6.0～6.5
- (3) 有機質肥料や緩効性肥料を主体とする。
- (4) キクは濃度障害に弱いので、前作の残肥料を把握した上で、施肥量を決定する。
(とくに砂壤土では注意する。) また、一時的な多用は禁物である。
- (5) ノンマルチ栽培の場合、追肥は葉色等を観察しながら適宜施用する。第2回追肥は摘心後に行い、第3回追肥は花芽分化前に施用する。第3回の追肥時期が遅れると切花の品質を劣化させるので注意する。

- (6) マルチ栽培の場合、緩効性肥料を中心に全量元肥とする。ただし、生育後期は生育状況に応じ追肥を行う。
- (7) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培が可能である。この場合、窒素成分量で1割程度が削減できる。
- (8) 夏秋ギク（「精の一世」等）については、施肥量を1/2減肥する。

2. バラ（加温周年型：養液栽培）[\[目次に戻る\]](#)

1) 地域……県内一円

2) 改善目標

適正な施肥を行い生育と切花の安定収入をはかる。

3) 施肥量

(1) 多量要素の処方

施肥成分		施肥量	
		(me/L)	(ppm)
窒素	NO ₃ -N	12.0	168
	NH ₄ -N	1.0	14
りん(P)		3.0	31
加里(K)		6.0	235
石灰(Ca)		6.0	120
苦土(Mg)		3.0	37
硫黄(S)		3.0	48

(2) 微量要素の処方 (ppm)

施肥成分	施肥量
鉄	3.0
マンガン	0.5
硼素	0.5
亜鉛	0.05
銅	0.02
モリブデン	0.01

4) 施肥設計上の要点

- (1) 使用する源水を分析し、各メーカーのロックウールシステムに適合した養液管理を行なうのが一般的であるが、ECやpH測定は随時行ないチェックを怠らないようにする。
- (2) 季節別濃度管理
夏季の高温・強光期には窒素、リン酸、カルシウム等の吸収量は低下し、冬季には吸収量が高くなるので、培養液管理は、秋から冬にかけては給液濃度を徐々に上げてECを1.0～1.5mS程度として株作りを行なう。
- (3) 銅欠乏、マンガン過剰に弱い品種群は、ノブレス、パレオ90等で、ややマンガンの高

濃度を必要とする品種群はローテローゼ、ティネケ等である。マンガン濃度は、ノブレスタイプで 0.3～0.5ppm、ローテローゼタイプで 0.5～0.7ppm が適正值とされている。

(4) 廃液については有効利用および、適正処理に努める。

3. カーネーション（加温周年型）[\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……県内一円

2) 土 壌……埴土～壤土

3) 改善目標

長期間切り花栽培に適した合理的施肥法と切花品質を改善する。

4) 施 肥 量

(10 a)			
区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥 (分 施)
窒 素	60kg	10kg	50kg
リ ン 酸	40	30	10
カ リ	60	10	50

5) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。ベンチ栽培の場合、有機質資材を容積比 20%程度施用する。
- (2) 好適 pH 6.0～6.5、EC 施肥前 0.2ms/cm 以下、生育初期 0.5ms/cm、生育中 0.6～0.8 ms/cm
- (3) 連作圃場では、窒素、リン酸、塩基等の集積がみられるので、土壌診断の結果に基づいた土壌改良と施肥が重要である。
- (4) 施肥窒素の利用率は 80%と高く、少ない量でも十分に吸収されるため、過剰な施肥は避ける。
- (5) 活着後～8月上旬までの初期生育段階では、土壌の養分条件により液肥で対応し、適正施肥に努める。
- (6) 生育期間が長く品質保持のために追肥は液肥を中心とする。1回当りの液肥施用量は窒素成分で 3 kg/10 a を限度として、生育状況に応じて施用する。ただし、夏期においては控えめとし、秋期には有機質肥料を施用する。
- (7) 土壌消毒（蒸気）前の窒素施用はさける。
- (8) 重粘土地帯の養液土耕栽培では、窒素施肥量の 3～4 割程度、灌水量の 2～3 割程度が削減可能である。

4. トルコギキョウ（促成、半促成、夏秋）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標

健全育成と品質の向上を図る。

4) 施 肥 量

(10a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥 (分施)
窒 素	10kg	5kg	5kg (液肥400～600倍液施用)
リ ン 酸	8	5	
カ リ	10	5	

5) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH 6.5～7.0
- (2) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (3) トルコギキョウはカルシウム欠乏による葉先枯れが発生しやすいため、窒素過多は避け、カルシウム資材の葉面散布を実施する。
- (4) 追肥は生育に応じて出蕾始までに3～4回施用する。

5. ホオズキ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内全域
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標

排水がよく、保水性のある肥沃な土壌が適地である。また、連作を嫌うので、できるだけ連作を避ける。

4) 施肥量

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	20	15	5
カ リ	20	15	5

5) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH 6.0～6.5
- (2) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (3) 窒素肥料の不足は樹勢が弱くなり着果不良の原因となりやすい。
- (4) 着果時期の過乾燥は落果の原因となりやすいので乾燥させない。
- (5) 追肥は4月に行うが、樹勢が悪い場合は5月にさらに行う。

(6) 専用の肥効調節型肥料を用いた全量元肥栽培が可能である。

(7) 雨よけや促成栽培の場合は、20%程度増肥する。

6. スカシユリ [\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……県内一円

2) 土 壌……埴土～壤土

3) 改善目標

施肥を適正に行い、根の発育、草たけの伸長をよくし品質の向上をはかる。

4) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥 (分施)
窒 素	20kg	15kg	5kg
リ ン 酸	20	15	5
カ リ	20	15	5
施 用 期	—	植付10日前	

5) 施肥設計上の要点

(1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。

(2) 生育に合わせ、液肥等で追肥を行う。

(3) pHは6～6.5の範囲とする。

7. オリエンタルハイブリッド [\[目次に戻る\]](#)

1) 地 域……県内一円

2) 土 壌……保水性、排水性に富み、有機物含量の多い砂壤土

3) 改善目標

上根が発達した1か月以降に本格的な吸収が始まるので、生育に応じて追肥を行う。

4) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	16kg	8kg	8kg
リ ン 酸	20	17	3
カ リ	16	8	8
施 用 時 期	—	植付10日前	

5) 施肥設計上の要点

(1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。

(2) 生育をみながら、1回当たり2kgを目安として液肥で追肥する。

(3) pHは、5.5～6.5の範囲とする。

- (4) 大球使用の場合は、液肥する。

8. グラジオラス（促成、普通、抑制）[\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
 2) 土 壌……埴土～壤土
 3) 改善目標
 切花品質の向上。
 4) 施肥量（普通）

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追肥 (分施)
窒 素	17kg	12kg	5kg
リ ン 酸	14	14	—
カ リ	13	9	4
施 用 時 期	—	定植15～20日前	本 葉 4 枚

5) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 (2) 好適 pH 6.0～6.5
 (3) 元肥は全層施肥とする。
 (4) 促成栽培の施肥量は本施肥量の 20%増とする。
 (5) 抑制栽培の施肥量は普通栽培に準ずるが寒害を受けやすいので肥切れしないようにする。

9. ストック [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
 2) 土 壌……埴土～壤土
 3) 改善目標
 有機質資材の施用と適正な施肥を行ない生育と切花品質の向上をはかる。
 4) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追肥 (分施)
窒 素	25kg	20kg	5kg 液肥400～ 600倍液を 施用
リ ン 酸	20	20	
カ リ	25	25	

5) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
 (2) 土壌 pH を、6.0～6.5 になるよう定植前に石灰質資材で調整する。

- (3) ホウ素欠乏が発生しやすいので pH の調整を行うとともに、土壌診断をもとにホウ素資材を施用するか、葉面散布も有効であるので応急的に施用する。

10. シンテッポウユリ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴土～砂質壤土
- 3) 改善目標

有機質資材の施用と適正な施肥を行い切花品質の向上をはかる。

- 4) 施 肥 量

(10 a)

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追肥 (3 回以上の分施)
窒 素	35kg	20kg	15kg
リ ン 酸	30	30	—
カ リ	35	20	15

- 5) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 追肥は 6 月上旬から生育に応じて施肥し、1 回の施用量は窒素成分で 5 kg を限度として数回に分けて施用する。
- (3) 好適 pH 6.0～6.5

11. シュッコンカスミソウ [\[目次に戻る\]](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標

作土は深耕し、低湿地は絶対にさけ、長期間切花栽培に適した施肥法と切花品質の向上を図る。

- 4) 施 肥 量

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	16kg	12kg	草丈30cm位 までに液肥 で施用 4kg
リ ン 酸	16	16	
カ リ	16	16	

- 5) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH 6.5～7.0
- (2) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。

12. スターチス・シヌアータ（促成、半促成）[〔目次に戻る〕](#)

- 1) 地 域……県内一円
- 2) 土 壌……埴土～壤土
- 3) 改善目標

窒素過多を避け品質の向上を図る。

4) 施 肥 量

5) 施肥設計上の要点

- (1) 好適 pH 6.0～6.5
- (2) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (3) 窒素肥料の多用をさけ茎が軟弱徒長しないように注意する。
- (4) 乾燥、および pH が不適な場合ホウ素欠乏が発生しやすいので、土壌診断をもとにホウ素資材を施用するか葉面散布を応急的に行う。

13. スイートピー [〔目次に戻る〕](#)

- 1) 地 域……杵島・藤津地区
- 2) 土 壌……埴土～壤土

区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥 (分施)
窒 素	12kg	8kg	4kg 〔 液肥で施用 する 〕
リ ン 酸	12	12	
カ リ	8	8	

3) 改善目標

深根性であるので有機質資材を施用し、深耕する。またできるだけ連作を避け、EC の高い場合除塩を行う。

4) 施 肥 量

(10 a)			
区 分	総 量 (成分)	元 肥	追 肥
窒 素	25kg	10kg	15kg
リ ン 酸	30	20	10
カ リ	30	15	15

5) 施肥設計上の要点

- (1) 堆肥等の有機物を施用して土づくりに努める。
- (2) 生育初期の窒素肥料の過剰は開花遅延となるので注意する。
- (3) 曇天が続くと落蕾が発生する。落蕾の防止対策として窒素過多、カリの不足に注意する。
- (4) 追肥は草勢をみて晴天時に液肥を施用する。
- (5) 好適 pH 6.5～7.0